

5. 法隆寺境内出土の埴輪と周辺の古墳

法隆寺境内の各所で埴輪片が出土している。従前の調査では知られなかつたことで、ここ数年の防災工事に伴う事前発掘調査の成果の一つに数えてもよい。これらの埴輪片は東院南門前の S D1390 のように古墳時代の溝から出土する例もあるが大部分は、古代・中世の整地土から検出される。これを明確にしておくことは法隆寺周辺の旧地形複元にも役立つ。

法隆寺周辺の現在する古墳

昭和49年に刊行された奈良県遺跡地図第一分冊の 7—D 図葉に法隆寺周辺の古墳も網羅的に表・図示されている。ところがこの地図に漏れ落ちもある。一般にこの種の遺跡地図には漏れ落ちが必ず伴う。その要因は三種類考えられる。第一は分布調査にはじまる作業工程中の不注意によるものである。第二は刊行・編集時には遺跡として地上にあらわれていないか、遺跡としていまだ考古学界で認識されていないもの。第三は過去に消滅したものである。¹⁾ このうち法隆寺周辺では第一のものとして天満地から北東にのびる谷間に位置する仏塚を²⁾ ぬかしてのがこれに該当する。第三の例が、これから述べるところである。奈良県遺跡地図の刊行後『斑鳩町の古墳』が刊行された。これと、『斑鳩仏塚古墳』に付載された斑鳩町遺跡分布図が、公刊されている遺跡分布図としてはもっとも詳しいが、表示されている古墳総数の約50基は現存する古墳のすべてを網羅するものではない。³⁾

明治40年に奈良県属であった野淵竜潛が調査した時にはつきの古墳が記録されている。

竜田村守谷

竜田村薬師山	※ (薬師山塚)
竜田村堂ノ前	※ (塚) ◎
竜田村小吉田 清水	※ (間人内親王墓伝承地) ◎
竜田村五百井 大塚	※ (大塚) ◎
法隆寺村埴輪 甲塚	※ (甲塚) ◎
法隆寺村法隆寺 灰塚	※ (灰塚)
法隆寺村法隆寺 藤ノ木	※ (御陵) ◎
法隆寺村法隆寺 小金	※ (小金塚)
法隆寺村法隆寺 亀塚	※ (亀 塚) ◎
法隆寺村法隆寺 舟塚	◎
法隆寺村法隆寺 王塚	◎
法隆寺村法隆寺 西塚	◎
法隆寺村ヒヅメ 金塚	※ (ヒヅメ金塚) ◎
法隆寺村法隆寺 佛塚	◎
法隆寺村東福寺 東福寺	駒ヶ塚※ (駒塚) ◎

法隆寺村東福寺	タ	山の東※（調子丸塚）◎
富郷村高安 外川		※（森）
富郷村幸前 西谷		※（榴桜塚）
富郷村三井 岡ヶ原		※（姫塚）
富郷村三井 ヒカイノ		※（瓦塚）◎
富郷村三井 ノキ		※（人王塚）
富郷村阿波 森		
富郷村高安 河原		
富郷村高安 都田		

以上である。※印を付したのは大正14年に刊行された『奈良県史蹟勝地調査会報告書第八回』に収載されている古墳である。文末に◎印を付したのが現存する古墳である。たとえば亀塚は法隆寺参道松並木の西側に小字名として亀塚が残されているが、現在、地上には痕跡はとどめてはいない。このように古墳は時代の経過と共に増加することは絶対になく、減少の一途なのである。もちろん分布調査漏は別の問題である。野淵竜潛⁶⁾、大正14年の第8回報告になく、現在は古墳として確認されている地点も多い。法隆寺裏山の梵天山古墳群や、町営水道浄水場西側の寺山横穴群がそれである。

最近、岩本次郎氏は斑鳩の条理を検討されたうえ、古墳の分布にも触述されて、注目される見解を述べている。『ところで条理地割の明らかな道路Nの南部合では、駒塚古墳（前方後円墳、5世紀ごろ、全長47m）、調子丸古墳（円墳、5世紀後半、径14m）、舟塚古墳（円墳、径5m）などが存在するにもかかわらず、条理型地割の明らかでない道路Nの部分では古墳が未発見なのが注意される。その相関理由は明確にし得ないが、…下略……』と。ここでいう道路Nは斑鳩町役場北約200mの地点から幸前集落に至るN20°Wの方向の斜交道路である。そして『斑鳩の古代歴史空間の推移としては4世紀後半～5世紀を通じて、大塚古墳を初めとする古墳の分布や酒ノ免集落遺跡が示すように、標高45m前後の微高地に開発と農業生産の展開がなされたと考える。』⁷⁾ところで、法隆寺境内の発掘では往々にして埴輪片の出土を見る。その代表例を記すとつぎのようになる。

- A 東院南門前の古墳時代の自然川（家形・円筒）
- B 聖徳会館北側の子院建設の整地土（円筒）
- C 大宝藏殿東側の子院建設の整地土（タ）
- D 大宝藏殿西側の子院建設の整地土（タ）
- E 食堂北側の子院建設の整地土（タ）
- F 花園院前の若草伽藍人工川の埋土（タ）

となり、量的に多いのはCとFである。他は量的に少ない。Aでは家形埴輪の台の一部が出土し、円筒片の穴が三角形であるものもあって、それが古墳時代前半のものであることを示

している。Cの資料は子院（多分宝蔵殿）の基壇を築くにあたって山地を用いて非常に固く締めている。この埋土から滑石製紡錘車が完形で出土しており、出土の埴輪片も古墳時代前期のものであった。埴輪片の表面や割れ口は新たらしく、埴輪片を含む土と共に、埴輪や紡錘車が、いずこの地からか、ここに運ばれた可能性が強い。なお時期を決定することが出来ないが、紡錘車の出土地点近くで銅片が出土している。あるいは古墳の副葬品の一部か。F地点出土の埴輪片については本概報に報告しているが量的にも多く、赤色顔料を塗ったものもある。この埴輪も破片は割合に大きく、割れ口も新しい。第71図の拓本でも判るように接合できるものもあって、埋め土とともに、ここに運ばれる（二次移動）する前には一括してあったことを示している。

ところで、埴輪が古墳時代に使用された場所については大別2種にわけられる。ひとつは古墳の墳丘上、あるいは周濠、周庭帶上など古墳に伴うもので、他は埴輪を用いて、古墳以外の地点においてする祭祀に伴うものである。⁸⁾前者には、奈良市歌姫横穴や桜井市珠城山第3号墳の横穴式石室底に、埴輪片を敷きつめていたものをも含めてよい。後者は、古墳近傍における祭祀と、古墳が近傍に存在しない地点とがある。ところで、法隆寺境内において出土する埴輪片は、どのような来歴をもつものであろうか。Aとした東院出土のものは古墳時代前期の自然川出土であるので、もともとその川辺における祭祀に伴うものであったかもしれないが、現北室院境内を中心とする古墳時代の微高地に古墳があったかもしれない。Dの資料はたぶん、室町時代以降、江戸時代初期の間に出土地から遠からざる地点に、その時代まで存在していた古墳を破壊し、その土砂を利用して基壇造成を行なったのであろう。古墳が所在した候補地としては、大宝蔵殿と天満池上地との間にある、西方より延びてきた丘陵上が考えられる。C地点へは、旧不淨門をへてまっすぐに到着しうる。なお、候補地の丘陵は、柿等の果樹園、竹林、畠地となり、現在では古墳はない。E地点出土のものは、若草伽藍人工溝S D3560の埋土出土であることなどから、現西院伽藍にあった古墳を破壊して整地工事が行なわれたと推認しうる。古墳の規模については判明しないが、埴輪の直径、⁹⁾技法が、三井に所在する瓦塚古墳のものに類似し、これよりやや遅れるものであろう。

法隆寺近在で、埴輪をもった古墳は梵天山古墳群、浄水場裏山の龍田寺山古墳群（仮称）、西里の藤ノ木古墳、小吉田清水垣内遺跡（遺跡地図では遺物散布地であるか、古墳であったらしい）、三井の瓦塚古墳があげられる。法隆寺のある丘陵は、現在は海拔50m～54mであるが、西院建立以前はもう少し高く、古墳もあったらしい。

法隆寺西大門を出ると、西里の村落に通じる町道があり、その北側に西北からくる水路が、西大門の前で、ほぼ直角に方向をかえて南に流れる。この水路に添って上流にゆくと西里の村の背後をとおって、慶花池の谷に至る。これと同じ地形が、天満地と毛無地のある谷間の水路である。天満地の水路は法隆寺東大門前をへて、ここで直角に曲り福園院前で更に直角に折れ曲り善住院の西側をへて南下する。いっぽう、天満地に流れ込まない毛無池等の水は

天満池の東側山添を深い谷で流れ、山添を東に曲ってゆく。東西の両水路はともに西方から東方へ山裾にそって流れる。天満地からの水路が人工の水利工事によってできた水路を踏襲しているものとしてよい。東院北側の東里集落の北例にはL型の河岸段丘風の旧河川を示す低みと高みが残されており、毛無地からの水路も、ある時には東里集落の背後まできていたことを示す。ところが、この両水路に挟まれた地域こそ、岩本氏が古墳の存在しない地域とされたところである。ところが、この地域は、梵天山から東南方にのび、上御堂の地点でさらに南に折れ曲ってのびる幅広い尾根筋であり、古墳の占地する地域としては、非常にふさわしい地点である。以上に述べたように、ここにも埴輪を伴う古墳があったのである。現在、法隆寺前の斑鳩町営駐車場の北西隈に残る舟塚古墳は、梵天山古墳群から西院地域の消滅古墳をへて、南にのびる多くの古墳の残影なのである。

終末期古墳

法隆寺の西にある大字西里の藤ノ木古墳は直径40m、高さ8mの円形の墳丘の周囲に濠状の低地をもつ。円墳としては大規模な古墳である。埴輪片もあり、葺石もある。この地点は小字を「御陵」といい、古くから崇峻天皇陵とか、山代大兄王の墓とか伝えるが、古墳自体は遅くとも六世紀初頭よりは古いものである。藤ノ木古墳の西方丘陵上、錦ヶ丘団地のある丘陵にも御坊山1号、2号、3号の各古墳があった。この小字御陵は、『聖蹟圖志』等に記す「御廟山」の訛である可能性がある。¹¹⁾ 御坊山1～3号墳はともに終末期古墳で、1号墳からは環付六花形金銅金具が出土し、2号墳は家形石棺の一部が出土しているが、ともに宅地造成工事によって攢乱されたのは残念である。第3号も又、宅地造成工事によって検出されたが、直径8m程の円墳で周囲に空堀があった。主体部は横口式石棺で、その中に漆塗陶棺を納める。陶棺のなかから、身長約160cmの老化の進んでいない男性成年の骨が琥珀製枕に頭をのせて出土し、副葬品としては三彩有蓋円硯と、長さ13.2cmの緑色ガラス管とが出土した。ガラス管は筆管と推定されており、妥当な解釈であろう。この古墳の問題点は多いが、このガラス筆管についてみてみよう。管見にして国内には類例はないが、ガラス製筆の存在は『筆經』、『初學記』等々にその存在が記される。わが国でも江戸時代の資料が多い。延宝四年（1676）に長崎の豪商末次家が闕所となった時の財産目録である『末次平蔵御闕所家財道具御拂帳』に『¹²⁾びいどろ筆軸 五本』とあるので、江戸時代の早い時期にガラス筆管があったことが判る。中国における実物としてもつとも古いのは隋煬帝の皇后楊麗華の孫である李靜訓が9才で死んだのち、大業4年（608）12月に埋葬された石棺からみつかった。¹³⁾ 李靜訓の頭蓋骨の左側に筆管あり、ガラス製管形器として報告されている。筆管は草緑色で長さ10.9cm、径0.9cmの用途不明のものであるが、1981年冬に報告書が刊行され、まもなく北京歴史博物館に展示された。実物をみた時に、まず色こそ違え御坊山古墳のものに非常によく似ていることに気がついた。形態上からはよく似ており、両者共に筆管としてよい。三彩有蓋円硯は、類似のない三彩硯で、典型的な三彩硯が7世紀の最末に成立する以前の技法で

あるらしく、今後の検討をまたねばならないが、ガラス筆管・硯とともに将来されたものであることは明らかである。

御坊山3号墳の築造年代については確定しえないが、7世紀中頃から末にかけてと、やや幅広く取っておくのがよい。すると、法隆寺を中心とする上宮王家の活動の後半にあたる年代と御坊山の年代がだぶっており、あるいは上宮王家を支えた膳氏との関係があるかもしれないが、ともかく異国情緒豊かな文具を身辺において、永久の旅路に出た壯年の男性は法隆寺とも縁の深かった人物であった。このことは、御坊山古墳の地点が法隆寺、またはその壇越である膳氏の勢力圏に入っていたことを示し、その一族の墓所と氏寺である法隆寺との間にあった藤ノ木古墳に「御陵」の名称が生じたのも、後世、御坊山の地へゆく途中の大古墳を誤って「御陵」とよび、その名が地名に冠せられたのもこのように考えれば理解しえるのではなかろうか。

注

- 1) 檻原考古学研究所編『奈良県遺跡地図第1分冊』1973年
- 2) 河上邦彦他『斑鳩仏塚古墳』1978年斑鳩町発刊
- 3) 法隆寺編『法隆寺発掘調査概報I』13ページ 1982年
- 4) 奈良県史蹟名勝天然記念物調査会編『奈良県史蹟勝地調査会報告書 第八回』1924年 のち1982年に再刊
- 5) 野淵龍潜氏の記録は目下、檻原考古学研究所で刊行の準備中である。
- 6) 岩本次郎「斑鳩地域における地割の再検」『文化財論叢』1983年
- 7) 以上A～Eは1982年度概報参照。
- 8) 森浩一「埴輪出土状態の再検討」古代学研究24
- 9) 久野邦雄、関川尚功「斑鳩町三井瓦塚1号墳発掘調査概報」『1976年度奈良県遺跡調査概報』
- 10) 泉森皎「斑鳩同辺の古墳の測量調査」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告1977 第32冊 1978年
- 11) 泉森皎編著『竜田御坊山古墳』1978年
- 12) 琥珀製枕については、類例に乏しく、その来源を明確にしがたいが、7世紀中頃の日本は琥珀の産地で、特産品としていたことが旧唐書の記事から判る。第5回目の遣唐使が孝徳天皇の白雉5年(654)2月に任命され、取新羅道、泊于夷州。遂到干京。そして、奉覲天子、つまり唐高宗の謁見を賜わるのである。この書紀に対応して、旧唐書卷四、本記第四の永徽5年(654)12月癸丑につぎの記事がある。「倭国献琥珀、碼碭。琥珀大如斗碼、碭大如五斗器」。これによれば琥珀は斗、つまり約6リットルの容器ほどの大きさで、碼碭は五斗ますほどの大きさであった。(斗を星座の斗とすることは、後文の五斗器からできない。) これからみて、当時の日本では琥珀が重視されていたことが判る。御坊山の被葬者は、大型の琥珀塊入手できる立場にあった。その原産地は古くから琥珀の産地として知られる茨城県久慈地方であろう。
- 13) 林源吉「長崎のビイドロとギャマン」『茶わん』78号 1937年
- 14) 馬得志編著『唐長安城郊隋唐墓』(中国田野考古報告集考古学専刊丁種 第22号) 1980年